

1. 武門武田家の来歴

信玄の死因と卒去地については信玄研究の上では依然として大きな謎である。そこで今日はこの問題に焦点を絞りたいと思うが、その前に一般に「武田」と言えば「信玄」と思われがちなので本論に入る前に武田氏の歴史を瞥見したいと思います。

武田の始祖 平安後期の新羅三郎義光。義光は出羽の後三年の役（1083）で兄義家を助けて清原氏を攻める。武勇があり野心家。

二代目義清 常陸国に住んで武田冠者を名乗っていたが、子の清光が暴れん坊だったため甲斐国市川庄へ流罪となる（1130）。流罪といっても甲斐はもともと源頼信・頼義が甲斐国主となっていた源氏の国。

四代目信義 源平の富士川合戦（1180）で勝利し、関東諸将から「甲斐源氏」と呼ばれ、ここに「武田ブランド」が生れる。頼朝は甲斐源氏の戦力に恐れ、信義を懲らしめ、その嫡子一条次郎忠頼を宴席で謀殺する。

七代目信時 蒙古襲来時（1274）に西国安芸（広島）守護職を兼ねていたので北条時宗の要請で防衛出動。そのまま安芸へ移住（安芸武田家）。しかし幕府の御内人北条頼綱が安達泰盛を殺害した霜月騒動（1285）の余波を受けて甲斐・安芸両守護職を没収される。

十代目信武 足利高氏に応じて東国へ転戦。同行した次子信成は甲斐守護職を引き継ぐ。後裔信虎が乱国の甲斐を統一して戦国大名となり、信玄・勝頼はその子孫。

なお室町將軍足利義教^{よしり}の命令で信武の惣領氏信の後裔・信栄^{しんひで}が大名一色義貫を殺害して若狭守護となったため戦国末期には若狭武田（本家）・甲斐武田・安芸武田の三家が存在。

しかし三家とも滅亡。若狭の最後の当主信明^{りゅうし}の夫人龍子は京極家の生まれで三人の子持ち。美貌ゆに豊臣秀吉に召し出され、その肖像画は京都国立博物館が管理。

2. 信玄の跡目政策の混迷

信玄は幼少時から内外の書を学んで教養があり、性格は意外にも繊細で慎重、そして不器用。詭道（謀略）に富む。最初の上杉夫人（扇谷上杉朝興の女）は死去。次いで駿府の寿桂尼（今川義元の母）の世話で天文5年（1536）に皇女三条夫人（後奈良天皇と女官水無瀬具子の子）を娶る。信虎は次郎信繁を跡目にしようとしたが、信玄がクーデターを起こして信虎を駿府へ追放（天文10年6月）。

信玄は天文11年7月、諏訪を攻めて諏訪頼重を甲府で謀殺。頼重の女・諏訪御寮人を拉致。あたかも正室を迎えるかのように結婚式を挙行。しかし侍大将らは「万が一、寝首を掻かれたらお家はどうなるのか」と猛抗議、しかし信玄はこれを無視。

正室三条夫人と嫡男太郎（義信）が存在するも、御寮人はやがて信玄最愛の夫人となり、

四郎（勝頼）を産む。そのため家中は混乱し、やがて跡目問題で信玄の頭のなかは大混乱。このことが武田滅亡の主因となった。

信玄が義信（妻は今川義元の女）と対立した原因は、義元討死直後に信玄が駿河侵攻の意欲を示したことにある。駿河派の義信は猛反発し、やがて信玄の駿河侵攻を阻止するため信玄謀殺を企図。しかし露見して永禄 10 年 10 月 19 日に殺害される。享年 30。

一方、四郎勝頼は諏訪御寮人の要請で諏訪家を再興して諏訪姓を名乗り、御寮人の死去後に迎えた油川夫人の子五郎盛信・六郎信貞はともに幼少時に他家の養子となる。また七郎信清は一旦、法善寺へ入ったが、勝頼滅亡後に上杉景勝のもとへ逃亡、米沢武田家の祖となる。

織田信長は義信投獄を知ると、跡目は勝頼と見込んで勝頼に姪を嫁がせ、男子が生まれると信玄は大喜びして諏訪家の子を養子に迎えて「信勝」と命名して跡目とした。しかし赤子では合戦が出来ない。古典的な信玄はやがて將軍義昭に駿河焼津の高草山で一万匹の御領所を差し出す代わりに勝頼に「官位と御一字」を賜わよう願い出た。

勝頼を武田姓に戻し、名に「信」の字を付けて跡目にしたかったのだ。しかし信長にがんじがらめにされ、自分のことで精一杯の將軍から返事がなく、やむをえず信勝が 16 歳になったら家督を継がせ、その間は勝頼が陣代を務めよ、と苦衷の遺言をして死去した。

3. 信玄の病名は何か

信玄は義信を殺害して念願の駿河侵攻を敢行しようとした矢先に病気となり、侍医板坂法印の診断は「この病は間もなくよくなるが、一兩年のうちに膈（かく）という病にかかるので京から典薬衆を呼び下して養生するように」ということであつた。しかし信玄は間もなく駿河を侵した。北条氏康は信玄に反発して三国同盟を破棄。怒った信玄は小田原攻めを敢行。そして遠州にも攻め込み、元亀 3 年（1572）に三方ヶ原で勝利。しかし体調が悪化し、浜名湖畔の引佐細江の刑部で年末年始の二週間を過ごした。

侍医がいう膈とは何か、胃がん、食道がん、胃潰瘍など食物が喉に詰まる病。信玄の病は肺結核説、あるいは日本住血吸虫説もある。また笛好きの信玄が東三河の野田城を攻めたとき敵城から聞こえてくる笛の音に聞きほれているとき鉄砲で狙撃されたという説もある。

信玄の侍医の一人・御宿監物みしゆくけんもつが小山田信茂に宛てた手紙（武家事紀巻 34）では、信玄の病は「肺肝に苦しむにより、病患たちまち腹心にきざして安んぜざること切なり。華佗（かだ。中国の三国時代の魏の名医で麻酔外科の祖）の術を尽くし、君臣佐史（くんしんさし。家臣）の薬を用いるといえども業病さらに癒えず」と描写されている。

『甲陽軍鑑』では、信玄は遺言で「6 年先、駿河出陣前、板坂法印がこの病は膈という煩いなり、と言っているが、これは工夫積りて心草臥れ候らえばかかる病なのだ」と言っている。おそらく、その根底には義信との 6 年越しの熾烈な抗争があり、それが原因でストレス性の胃潰瘍いにかかって悪化したのではないか、と思われる。また、それに加えて野田城で狙撃された鉄砲傷も一因になったものと思われる。それは麻酔科学の祖・華佗の話からして何らかの手術が行われたと考えられるからである。

信玄の最期の様子は元亀 4 年（1573）2 月 14 日に気鬱症対策として四花しかの灸をすえ、4 月

11日未の刻より気分が悪くなって脈が殊の外はやくなった。そして12日の夜、亥の刻に口中にはくさが出来、歯が5ツ6ツ抜け、それより次第に弱ってきた。すでに死脈が打ち始め、ことごとく召し寄せて遺言を述べたと言う。

4. 信玄の卒去地はどこか

私は信玄の卒去地を探るため南信州と東三河を二回訪ねている。最初は徒歩でくまなく歩き、ついで車で行った。信玄は三河方面へ遠征のとき信州阿智村(飯田市西方)の長岳寺を宿所としてよく利用していた。そのためか信玄の卒去地は長岳寺とされている。しかし私は信州南端の根羽村の横畑集落の道端を卒去地と考えたい。

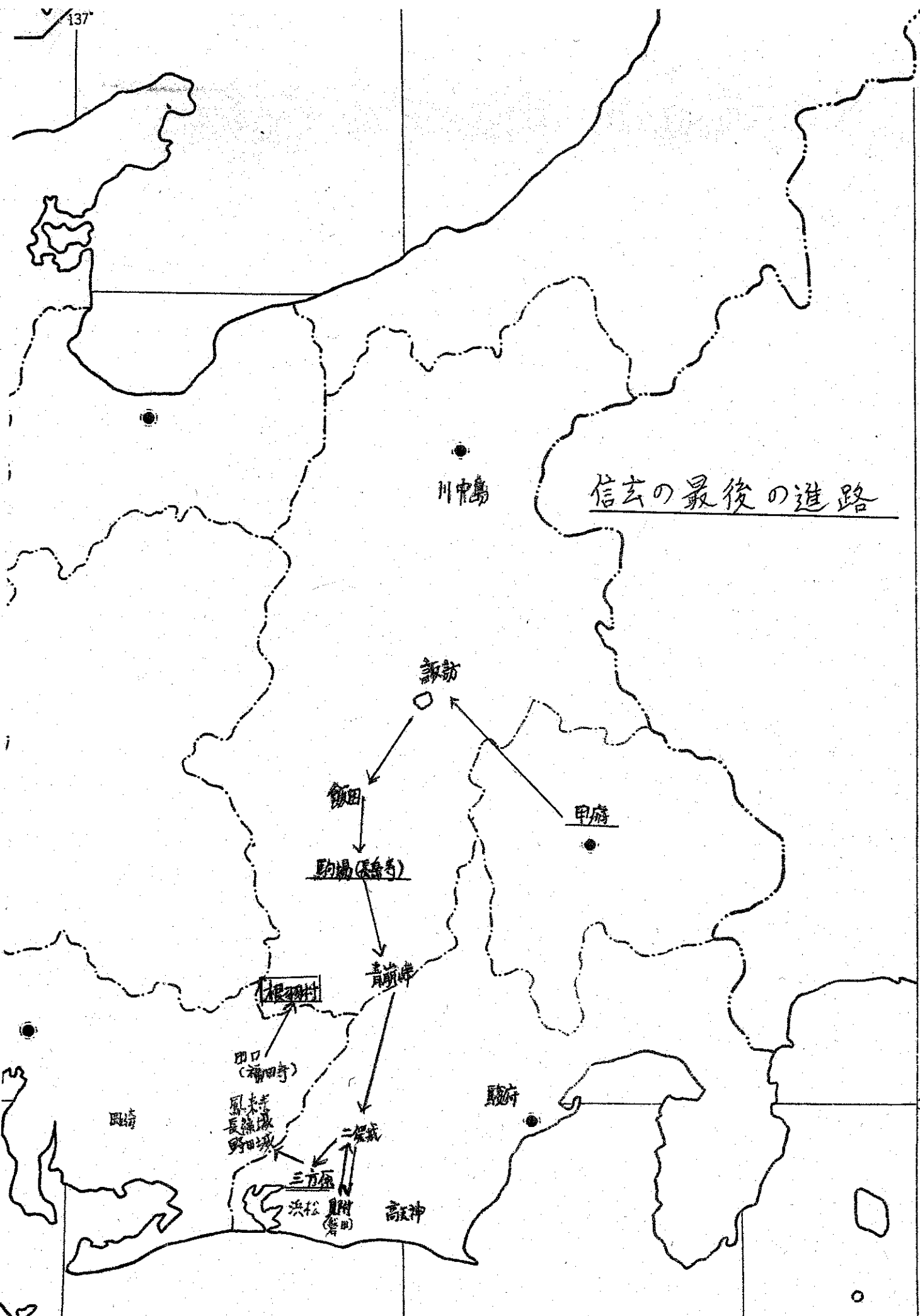
信玄は帰国の途路、東三河の長篠城、鳳来寺、田口の福田寺(信玄の墓地がある)などで休養し、調子が良いときは古歌を吟じ、歌を詠み、そして数々の遺言を述べた。膨大な遺言の中身は『甲陽軍鑑』に書かれているが、自分の葬儀は不要にして具足を着せて諏訪湖へ沈めるようにとのこと、跡目と陣代のこと、三年間は国内政治に専念するようとのこと、勝頼が使用する旗は武田の旗を禁じ、大文字の旗とすること、さらには信長、家康、謙信対策など多岐にわたっている。そして最後に山県三郎兵衛昌景を呼び、「その方、旗をば瀬田へ立て候へ」と述べている。遺体を「諏訪湖に」とは諏訪御寮人を余程愛していたのであろう。また三年間は「内治に専念を」と言っても、信長・家康は信玄の死を知れば喜び勇んで攻めてこよう。遺言には無理な点が多い。

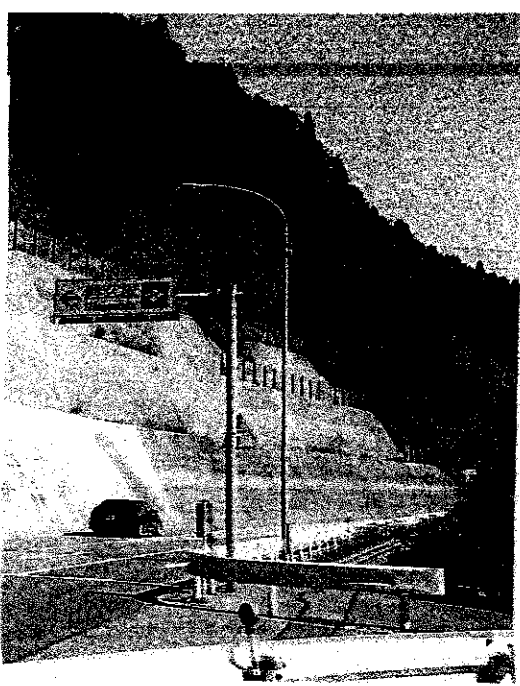
一方、信玄側近で北信の海津城主・香坂^{こうさか}弾正昌信は『甲陽軍鑑』で信玄は「根羽村でご他界」と述べている。南信州へ赴いて見ると、長岳寺説より根羽村説の方がはるかに実感がこもっている。思うに信玄は根羽村で死去して長岳寺へ運ばれ、そこで勝頼や侍大将らが遺体を深夜に甲府へ運ぶこと、信玄と瓜二つの実弟武田信廉(のぶかど)を信玄存生の如く帰国させることなど善後策を相談したのであろう。

根羽村の現地には高さ1.8mの大きな供養塔、いわゆる信玄塚がある。供養塔が信玄のものかどうか、という議論がある。しかし、この辺鄙な地にふさわしいのは信玄意外には考えられない。供養塔は国道建設のため2回ほど移設され、いまは国道153号沿いに建てられている。信玄が死去すると、風林火山の大旗が横に倒され、そのため集落名は当初は「横旗」と呼ばれたというが、いまは「横畑」に改められている。

—以士

信玄の最後の進路





長野県根羽村 信玄供養塔 1.8m

信玄の作法

1. 弓矢のこと、勝負のことは6分、7分の勝ちが10分の勝ちである。大敵にはこの考えが肝要である。8分の勝ちが危うい。9分、10分の勝ちが味方大負けの下作りである。
2. 弓矢の取り方は40歳より内は勝つように、40歳より後は負けないようにする。20歳に内外でも少身なる敵には負けないようにし、勝ち過ぎてはいけない。「遠慮」の2文字と「思案工夫」の4文字をもって心長くあって「後途の勝ち」を肝要にすべきである。

信玄の歌（出陣前に不動明王にお参りしての帰り道、恵林寺の住職に気付かれて是非とも取^寄って行くようにと、さそわれたとき詠んだ歌）

「さそはずばくやしからましさくら花 さねこんころは雪のふる寺」

おわり